図書案内

2023 年　11 月号

本を開けば感じる秋風

「冬隣」という季語があります。

いよいよ冬が直ぐ隣にあるという実感が沸き、厳しい冬に備える季節を表す言葉です。

文化祭も終わり、二学期の終わりと共に冬が近づいてきました。そろそろ合唱コンクール、そして皆様大好き期末テストもやって来ることでしょう。

今月のテーマは秋風。去り行く秋を惜しむ本を紹介します。

『山月記』／中島敦

才能に優れていたが頑固で傲慢だった李徴は詩人を夢見て官吏の職を辞す。しかし詩人として名は上がらず、生活は苦しくなる。数年後、妻子のために再び地方官吏となるも自尊心に障ってならない。遂に李徴は出張中に発狂し、姿を消すがその翌年、科挙を共に突破した旧友、袁傪は勅命で嶺南に使いに出た道中、人食い虎となった李徴と会う。姿の見えないまま李徴の話を聞いて別れた袁傪は、最後に虎となった李徴を見て嶺南へと向かう。

明言されずとも風景描写より秋なのです。

「理由もわからずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。」

『考える力をつける論文教室』／今野雅方

皆さんは、論文を書いたことがありますか？探究活動や部活動で書いたことのある人も多くいるかもしれません。この本は、そのような人たちに、ぜひおすすめしたいです。

この本を読んで、論文の書き方が分かるのはもちろん、現代文の読解や、数学の論理の考え方など幅広い分野の能力をつけることができます。また、各テーマの間に休憩用の話もあるので、すぐに読むことができます。ぜひ、読んでください。

論文は対話なのだ

『夜のピクニック』／恩田陸

高校生活最後を飾る行事「歩交祭」。それは全校生徒が夜を徹して 80 キロ歩き通すという、北高の伝統行事だった。甲田貴子はひそかな誓いを胸に抱いて、歩行際に挑んだ。三年間、誰にも言えなかった秘密を清算するために。学校生活の思い出や卒業後の夢などかたらいつつ、親友たちと歩きながらも、貴子だけは、小さな賭けに胸を焦がしていた。秋を感じる青春物語である。

「何かが終わる。みんな終わる。だけど、何かの終わりは、いつだって何かの始まりなのだ。」

『伊豆の踊子』／川端康成

伊豆を旅する青年は道中、踊子の少女の美しさに惹きつけられる。少女の天真爛漫さ、献身的な真心に青年の内面的な美しさへの恋心に変わった。しかし、踊子は当時差別される立場。叶わぬ身分違いの恋に青年の複雑な心は揺れる。

「雪国」で有名な康成ですが、本作でも巧みな情景描写が見物です。舞台は伊豆の秋。実際伊豆はやたら雨が降るらしいですよ。

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

なぜ植物は紅葉するのだろうか？

秋になると紅葉した木々がよく見られますが、なぜそのような植物は紅葉するのでしょうか。ここでは、2 つの説を扱います。１つ目は、過剰な光から葉を守るという説です。寒さにより光合成活性が落ちた状態の葉に過剰な光が入ると、細胞へのダメージや早期落葉がもたらされます。それを防ぐために赤色の色素が合成されている可能性があります。赤色の色素は短波長の光を吸収するため、日傘のように入ってくる光の量をやわらげる効果があると考えられます。２つ目は、虫に対する警告という説です。自分は栄養性に乏しいなど、食べてもいいことはないから近づくな、と伝えるシグナルとしての赤色です。虫はウイルスを媒介することもあるため、なるべく遠ざけたいわけです。このような、ことから木々は赤色に紅葉するようです。

（参考　https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z1304_00190.html）